里見八犬傳

拾八編

四十九

3416
101

13
34
107

十八編 南總里見八犬傳 第九輯 巻之四十九

曲亭主人編次
松野勝義 閲

東都
文溪堂藏

第百七十九回下

題目は前に出さう東西和睦して
両國津を開くとのゝ局末是なり

再説巨田助友齋藤高實下河邊行包原亂入直江莊司兼光水崎蟹大
等は犬阪犬塚犬村犬川等の諸犬士を案内せて奥の乾淨処なる坐席を造
るゝ成氏憲房朝良朝寧自亂等の諸敗將は既に其告あるをもて皆うち聚て
あゝに居り。管衙の武士二三十名。其戸口をぞ守りける。當下助友高實行
包等の六個の使者は諸犬士を相引まて各其主を拜謁を。面正しくもあき
所行なれば只恙なきを祝し。且和議のうしを告て近き日を迎の士卒をまゐらせ
べしなどのゝのゝ況諸敗將は孰り一人も恥ざるべき心ぞは果敢々々しらぬを。憲

奉ふ重亂久執合ふて。里見の慈善と大江が神藥の效驗を告るゞを是ゞ諜言ふ
似れば助友ハ好も聞ゞ。恥て身の暇を告て行包高實等と俱ふ皆客の間ふ
退けゞ。大阪下野犬塚信濃是を送りて異日を契るふ助友等ハ對面の款びを
演て辭し去まく志ゐる程ふ外面ふ咳して。突と内ふ入る者あり。是則別人ゞ犬山
道節帶刀先生忠與ゞ犬塚大阪の間ふ坐して。佐と助友ふ向ひてのよゝう既ふ面
善ふていへども。折ゞ計まいまゞ御意を沿ぎ。和議成りていへゞ約束の日ふ至りて城地を
返しまゐらせんの勿論ゞ遮莫千住竹塚ふ遠ゝぬ穗北の莊ハ落魄餘之七
有種の乾父ゞ。水垣殘三夏行ゞ自沿開發の新田ふて今ハ有種が所沿ゞ然を
有種ハ根角谷中ふ談言ふて一旦没落ゝれども扇谷殿敗北の折有種悄
地ふ便宜を沿て忍岡の城を拔き旦穗北の莊を捕復して一時ふ恥を雪ゝう然
ども東西和睦の上ハ有種ふ說諭して忍岡の城ハ形の如く返しまゐらせんゞ。異

議ゐべくもいゞ。但穗北の莊と其前後左右ゐる四ヶ村ハ皆有種ふ隨從
せり。有徒れば件の五ヶ村ハ有種ゞ自沿ふて返しまゐらせべゝ莊園ふあらゞ。那
有種ハいまゞ當家ふ仕へざるゞども。其岳丈夏行と俱ふ原是豊嶋の殘黨な
まべ我忠與と空谷是音の憶ゐ紀ふあらゞ。這義什麼と論ぜれば助友聽く
點頭て其義ゐろ沿ハ豫より聞く那有種ハ人の許せる武勇の義士ゞ其
所沿の莊園を今更誰ゞ掠奪せん其義寡君定正ふ聞え上て子子孫孫ふ
至るまゞ除地ゐんの勿論ゞ這義ハ心安ゐべしと。誓ふが如く答ふる折ゐ。犬
江親兵衛も出て來て這席ふ入りしゝ高實行包胤ゝハ言の長ゝを
聚ふて我們ハ先旅館ふ退りて歸帆の准備をまべけるとて直江水崎も共
侶ふ告別ゐ身を起せゞ大塚信濃遽しく立て遥ふ送りける。當下犬江親
兵衛ハ助友ふ向ひてのよゝう。言新しくいへども。御家の忠臣河鯉守如の獨子

る。河鯉佐太郎孝嗣ハ靈狐の寃助ゆゑ讒死の刄を免れしゆゑ。政木大全と名を改めて今ハ當家の家臣ゆゑ其寃枉の罪あるよしハ扇谷の両公子ゑ孝嗣みづから啖え上て那寃を鮮られば後ゑこそ听るべけれ。這義を忘るゝなかれ。と告まべ助友嗟嘆して。現ゑ河鯉親子の如きハ忠臣と孝子なるゑ讒者の為ゑ害ひまして親ハ死し子ハ免れて今ゆゑ隣國の股肱ゑ做きるハ悔て及ばぬゆゑなり。這折をもて對面して後の交を結びまく欲ゑ這詞を饒しゆゑまどゆゑ。と

ゆゑゑ親兵衛欽びて。悄と重紙戶をうち鳴せば外面ゑ立在る。政木大全孝嗣ハ方三四寸なる梧桐の小箱を三方托ゆうち載て开を捧ゆ内ゑ入り。先其小箱を大阪の身邊ゑやをら閣程ゑ親兵衛則孝嗣を先助友ゑ引合まれば。迭の口宜他事もなく和睦の欽びを演ゆける其言訖て大阪下野ハ件の三方托を曳ト在て。却助友ゑ告るやう。御ハ扇谷殿和睦の誓ゑそ箭を折て贈り

ゆゑしを。寡君既ゑ拜受せり。是ゑよりて義成も亦這一種をもて贈り物を。正ゑ是東西唇歯の交を結びて相背ざらん照据なり。這義宜く賢侯ゆゑ上さまゆゑしねと。演て件の三方托ゑ載る小箱を遞與まゑぞ。助友ハ諾と義て先其小箱を熟覽るゑ蓋ゑ十二の文字ありて豆有二頁長杉無木吉義成封とゆゑしゆゑ助友眉をうち顰めて左さる右さる。思ひ惟るゑ豆一頁ある者是頭の字ゑ又長杉ゑ木なくして十口とハ長々十吉の三字ゑ是を合まれば其字是髪ゑ頭と連續ゆる時ハ則是頭髪ゑ然ハ這箱の内なるハ去歳の十二月八日の夜丈我君矢口の河邊ゑて敵の伏兵を免れ難て那隊の頭人小水門目ゑ合るらせゆゑし。御頭髪を今返さるくゆゑゆゑむざとんと夙く悟りて且恥てうち戴きて其箱を懷ゑ楚と夾て却凰智ゑ答るやう。仁君哲言の御貺。御意の趣義りぬ立歸りて寡君ゑ渡さゞるゆゑ欽びいん城受取ゑ定めらるゝ。二十

一日の程もわづか。身の暇をゆるしてんと詞急しく別を告て旅館を投て立て
ゆくを。大阪下野。政木大全留もめぐ共侶の玄関までぞ送りける。偖而巨田
新六郎助友いたぞ旅館へ還と聴て高實行包信介等の五個の使者
商量を果て且秋篠廣當熊谷直親。あり一つの趣を偖々と告知せて
歸帆の免を乞ふ。五個の使者と共侶の當晩洲崎の港口より各快船に
うち乗て其投方へぞ走らせける。偖當就ても多くぞ船を舵を船工を傭ひて亟の所
用の充しぞ這事後の沒えけり。然べ其次の日の大阪下野大山道節。犬村大
学の義成主の見参して城遞與しの事を命ぜられ且堀内貞注小森高宗登
桐良二子等の者の旨を傳へよとて照書一通を渡しのべ三犬士等を兼りて。
退りて躰て伴の士卒をいざ立て水路より新井五十子忍岡の城を投てぞ還り
ける。左右まる程の四月二十一日のるべ山内の家老齋藤高實并の兵頭

絶内外助惟定等の士卒一千許を將て鎌倉へ來て其主山内顕定の館を
受合ならまくも又其隊の頭人建柴浦伏弘望の士卒一三百名を將て船の
宴房の迎のゆくりまの時堀内雜魚太郎貞澄の大阪下野の傳達せいまそ
其下知を乞べ隨即齋藤高實の鎌倉の館を遞與まの敢秋毫も犯を
とらく隊の兵三千餘名を將て先新井まで退くの士卒都礼讓の貌の毫も乱
雜あるゆえけまべ齋藤高實はまうえ山内の士卒咸敬服と及び難しと思ひけり。
亦程の新井より犬村大学の既の城遞與しの准備の田税戸賀九郎逸時は
屋八郎景能等と商量して降人甲良亀九郎等をもて三浦義同の宅養の和
議の成しよしを告て且城兵の降参まくると三浦四十八郷の士民の相從へるを召聚
合て則宣示やう。若們時の勢を見て苟且殺の從ふとのども。今の東西和議成て。
當城も亦故の如く三浦殿の返しまのらまれべ若們も故の如く亦是城主の民

たるべ。各々這意を心よくと言叮嚀に説諭べ大家空つ嘆息して合難く開が中に甲良亀九郎找て出て其義心ゐいへども三浦親子ハ暴雄と當城に還り來ハ我們が敵に降りて憎て必殺やせん願ふハ安房へ倶しねと請べ又三浦四十八郷る。御士豪民村長們も異口同様に願ふやう己れハ御威勢に怕れて従まつりしに いつぞ。安房の館の御仁政を慕ひまつる故なれば いざこの儘幾年でも御領の民たちまく欲す。這義を饒させ給へと勸解るに大学空めぎ介の心を我吐るふ和睦を返して其地を返さど且其民を奪ふ和睦の名ありて和睦の實なし我何ぞ然る変詐をせんや。甲良生も這義を思ひね一旦我に降りしそも三浦殿親子先度に懲て若們を罪べくと心許なく思ひるべ我又在是せん術あり必怕べからざと諭つ一紙の告文に降人甲良亀九郎并に三浦の民一毋の罪ゐなよと書寫て城の玄関に貼しける。有徳一程に堀内貞澄ハ鎌倉より退き來て則大村大学に鎌倉のゐの趣を徳々と告しるべ。大学則其隊の士卒と三浦四十八郷の士民に身の暇を取らせて各其地に返し遣るに皆悉々と去るに忍びず猶云々と請ふ者ありしを大学饒さど且のやう若們知ぞや。鄙語云幹木の勝る朴枝なし今新恩を耳と舊地を去らば後悔めん。然とも所依ある者ゆらべ異日稲村へまゐるべし。今番ハ倶しざして皆悉出し遣りけり。有徳一程に水崎蜑人小磯真砂ハ残兵三四百人を將て沼田の城より這里に來て大学并に貞澄逸時景能等に和睦の歡びを演ずるとき當下大学ハ戰粟銭財武具調度に至るまで皆弄帳に寫し目録に合して是を蜑人真砂等に遞與まに明白に記して犯し掠る者なし。且のやう甲良亀九郎等城兵の苟且我に従ひしハ城内に三浦殿の宅眷と士卒の妻子等のあれば。徳れば他們に不忠の罪なし。我其義を寫して玄関に貼置きて義同義武ども來まさば各這意を傳へよと言詳に教諭せば蜑人真砂等歓び羨て敢違に

者なりけり。然べきの日。城内の掃除なども届ざる所なく。傲慢不礼の事あらば。礼儀なる。其名虚しからざれば。姫人真砂従兵士などいとくまもり。敬服して別を惜む意あり。徒而犬村大学は。堀内貞澄田税逃時。古屋景能などと倶に安房より従ひ来る。隊兵僅に三百餘名を将て。新井の城を辭し去りて水路を安房へ還らまくまる程に三浦四十八郷なる村長壮客等は猶別を惜む者あり。其毎数百名沙を蹕揚て赴りて来り。大学が乗る船の纜を曳止めて相公などそ我们を棄て安房へ還りなふぞや。願ふは這地に在城して猶善政を施しなば。凍餓死亡の憂ひなく。楽しく妻孥を養ふべしいそくと諸聲に叫びて放ぶべくもあらざれば。大学是を慰めて諭せども只貫縁なる貞澄も亦逸時景能も禁めも難く大刀引抜きて纜弗と斫捨るべ順風に任せる船ユ毎に本船伴船十餘艘艘柏子齊しく漕ぎて去る。招ふに村長壮客。沙に滾び品に携りて。

喚聲のこゑ浦風に吹送られて遠離り行。船まで幽に聞えけり。然べきの後里見実堯又里見義弘の時に至りて。找て鎌倉に乱入りしに日に三浦四十八郷を殺捕りて。久しく里見の所領に做ふしに。這時既に那地の民の徳を慕へる餘波にて義成主礼儀の植し善根なるべしと。時の識者は論じける。されば是後の話に。小程に犬阪下野亂智は五十子の城に入りて來て城遞與の事遺もなく。新井大塚及石濱なる三人城に義成主の下知を傳へて。且浦安牛助千代丸圖書助等を俱に各士卒を部志て。件の准備を做さ程に二十一日に做りしに。這朝犬阪亂智は去歳の冬より當城に囚置なる。大石憲儀と細坂四郎等を牽出させて。告るに和議の成り志をもて志て且のみならず。我當城に和殿等を久しく屏居ゐらせしに。河堀殿と貌姑姫のまくに在る故にて。和殿等と共侶に這城郭を領守る。亂智は用心なるに東西和睦成りて。今日は當所と大塚忍岡の城までも皆是扇谷殿に

返しまゐらせるなれば。和殿等這里に在らば面目なるべし。まの故に放免せ去向へ各隨意せよ。おゝ亂智が寸志なりとそ。大刀兵具と始憲儀綱阪等ら。無くる馬さえ牽出させ。皆是を合ゐらせしゝべ。憲儀と綱阪四郎等い恥て其欺びをゆゐのゝ。阿容々々として退きて且城兵に送られて五十子の城を出しゝ。投て往方を定めるぎ。左にも右にも面伏なれば館定正の迎に来ゐらんとそ。河鯉の城へいそぐ程に其路一里有餘にして大塚の城の兵頭なりける反橋雜記丁田畔四郎等ら。大塚の城を受合ひんとそ。殘兵僅に三百名を領て。河鯉の城より來ぬるに逢ひけり。憲儀是に勢馮きて。然ば先我城を受合て。明日河鯉の城へ参そ其里より路を引復其。綱阪四郎も已をなるぎ憲儀に相俱して大塚の城へいそぐけり。然べ又去歳の冬より五十子の城に在りける妙真音音曳る單節い河堀殿と貌姑姫を守護の為に附らるて。那十個の女房等と俱に最正首に

仕る程に。東西和睦整ひて既に城遁與の日に做りしゝべ這朝亂智い河堀殿に見参して。和睦の事仔々と城遁與のなさを告まゐらせて。且妙真音音曳る單節い亂智に先ぐて。船に安房へ返さんとそ心ゐさまの遽しく。亦外面退出しゝべ妙真音音曳る單節に辭去まく欲する程に。河堀殿も貌姑姫も他等ら日屬正首に仕へけり。好意を感て別を惜みゐる事大うるぎ。金銀をもて鏤うる匣玳瑁の櫛釵児みどをゐ自許に取出て餞別にそ與へゐを妙真音音曳る單節い推辭て敢一箇も受ず。奴四人い數ゐぬ原い賤婦人も伝れども里見殿の御恩に大江親兵衛仁に大母姥雪代四郎與保が渾家よ媳婦よと人に知られて東西還しくい伝らぬ。是賜りて何にせん畏うい伝れども是い這儘措せゐと異口同様に辭ゐの。敢受ず意ゐけ是ば河堀殿い困て果て後方に伝る女房に恁々と吩付て唐織の夾衣の蘭奢の熏ゐをえらぬを四襲許出させて廣益にうち載て妙真等四箇の婦女子に

四犬女功成りて衛を両夫人と別く
ひくま
妙椿
ひとよ
ぎょれん

ちこあ
ハ犬ぐあ
かーづえの
ぜんぞう

みづから萬ぬて宣やう。汝等の鯁直る東西受らまねば術もなけまど時ハ今四月の下浣ゆそ今日ハ殊更温暖るゆ去歳の儘る小袖でハ汗ゆ堪ぎめゆんぎゃん切て是をば受てよと言叮寧ゆ諭ゆ人ハ妙真音音曳ゆ單節ハ貴人の恁まぞゆ理り迫て云々と宣るを猶幾番も固辭んいさまどゆて只ゆ俱ゆ受戴きて被ぎて躯て退きて各うち被て出て來ハ皆席末ゆ居並びて其欽びを稟ゆぞ。河堀殿ハ本意ゆそ徐ゆ其方を見々ゆ見べ他等ハ今ゆうる夾衣を下ゆ上今まぞゆる舊衣を吞胡意上ゆ被されば河堀殿訝りて先其所以を問ゆ人ハ妙真音音等答てゆる。這舊衣ハ去歳の冬我瀧田の老侯の被けさゆひる恩賜の東西でゆるかし今ゆうゆる夾衣ハ則是時服ゆ且綺羅やゆゆまどゆゆて這新賜を那舊思ゆ思ひ易んやゆて舊衣を今も猶上ゆ被うゆ餘馨を拜て本を忘まぬ。愚意ゆこそゆれと解まて。さてハとだゆゆ河堀殿ハ興ハ酣て又ハふゆもゆゆ妙

真音音曳ゆ單節ハ共侶ゆ別を告ゆ既ゆ和睦整て今日ハ城を返さゆべ。這故ゆ奴毎ハ身の暇を賜りて船出して安房へ還りゆらん玉椿の八千歳まで恙なく在さんをを祈りまゆゆゆるのみ館定正程なく還らせゆゆ。愚夏を轉て御欽びハ人ゆゆんと查まゆゆぬ今ハあも御別ゆゆゆゆゆぬとハ果て俱ゆ身を起せば河堀殿も貌姑姫も禁難く云々と詞寡く労ひゆふ當下侍坐せ女房が一両個ゆゆて鈴鐸の間まぞ送りける有徒程ゆ小森但一郎高宗木曽三次季元ハ正兵一千餘名をゆて大塚の城ゆゆゆゆ來ゆ大阪下野ゆ告るやう鄙ゆ六石憲重の兵頭反橋雜記丁田畔四郎と喚做を者殘兵二三百名をゆて城を受合ゆんぞ來ゆけり开が頭人ハ豫ゆゆ放免せゆゆべ。を使えゆる大石源左衛門憲儀ゆ綱阪四郎相從へゆ。這故ゆ咱等敢饒さぞ窘ゆぞ且道く。源左殿ハ當城主大石氏の嫡子ゆまぞゆ去歳ゆ久く擒ゆせゆまて。刑餘放免の罪人ゆ綱阪四郎ゆ是ゆ同ド

這城郭に源左殿に返まゐらせまゐらせまゐらせれば何ぞ刑餘の人に遮與さん和殿両個に且退きね扇谷殿より遣さるる友橋丁田に城を遮與て咱等退りて後にこそ出入い和殿等の隨意なること勿論なるべけれ目今に容がこそ城門より内に饒されば憲儀大く腹を立て好々其義ならば我い館の御迎に河鯉へことゆくべけれと呼まる友橋雜記が將て來る人馬を幾許か分させて伴當に乗る馬に跨りて綱阪四郎と共侶に出でゐたるべ咱等い李元と相共に雜記畔四郎に城を遮與て且從來の隊の兵をのゝ俱しとかゝ來つると告まゐ又木曽三双季元も其足らざるを補ふそ那里の光景を報る折らん妙真音音曳る單郎に後堂より俱に退き來てゐるーるの趣を大阪に告知まれば亂智ゆつ合咲て小森生の計ひも妙真音音刀自等の寡慾なるも皆是忠義の真面目にて最愉快といひつべし城遮與の時分も近づきぬとのひつ先雜兵をもて浦安牛助友勝を召よせて且のやうに今日城遮與の事果て我们稲村へ退る折這四個の婦女子を同船せべ云々と後に人の議論ゆらん和殿に是始より這男婦烈女等を俱に大功を成さーー人いるべ今より同船して稲村へ送りるひね然べ猿岡猿八と雜兵二三十名を從せんとすいそぶせべ友勝に異義もなく高宗季元妙真音音曳る單郎に和睦の歌びを演るべーて退りて准備を做を程に亂智に又猿八等に其事を吹聴るに船に夏く柴浦に維ぎそゆり然べ音音等四個の婦女子に大阪以下の頭人に別を告げて身裝して友勝猿八等と俱に伴の雜兵を將て城を出て柴浦より船に乗る時に音音に舵工を召よせて咱等に大茂林に所要ゆり那里へ船を寄よと舵工等則あろ沼に漕出して程もなく船を那浦に歌ーるべ音音に一個の雜兵をして海苔七夫婦を召よせていやう汝等咱を相忘れいせで去歳の十二月八日の夕べ咱この浦に流寓して命終らんとせし折に汝等の介抱にて身に恙なく思ひの隨に。

敵を謀りて功成りて。這人々と共侶に目今安房へ還るべ。咱は則里見殿の家臣なり。
姥雪代四郎が老婆音音是と又這同船三個の婦人は大江親兵衛主の大母
妙真刀自并に栽二個の媳婦曳る單節と嗅做を者ぞ汝等耳の底に藏て
後の話柄にせよ。然ども今も旅なれば汝等に報ひに做をべ。東西の一先是を取まる
ぞとそ。御問に河堀殿の賜りうる唐織の夾衣を曳る單節が品まぐも三龍衣合出て
與まべ。妙真も又其衣を那賞禄にとそ合ら甘けり。然ばそあれ海岩七夫婦は憶へ
ざりける。那老女の這光景に胆を潰して呆るゝ半晌許夫婦両人に件の衣を受けり
捧げ。夢うとぞりに満面都てうち笑れて。其欲びをいきくまるを。音音は急に推禁
めて。咱等は去向をいそぐべ。暇ある日に稲村の城内へ尋來よさらばべとの間に又漕出を順
て。風の船を禁め難う海岩七は妻共侶に建柴の立盡きまで見送りけり。海岩七夫
婦のみ。這下に話す。有低一程に巨田新六郎助友は小幡木工頭東良の獨子なる。

小幡木工太郎東震と俱に二三千の士卒を將て五十子の城に來ぬる程に人馬を夏冬
城外に留在せ。助友と東震は有名の老兵百名許を從へて。徐に城に入りしぐ大阪
下野亂智は鮫内葉四郎をもと是を迎へさせて小森高宗木曽季元千代丸
豊俊小水門堅宗等と俱に助友東震に對面を送の口誼言託て河堀殿と貌
姑姫の恙なきを告るとき。低而城遽與の作法あり。開は大村大学が做す事の趣と
異なるべくもあらざまべ言肖て備にせど當下大阪下野は城兵の降參せしは皆助友に
返と俱せど只從來の士卒三千餘名を三隊に分て其二隊は高宗季元豊俊
堅宗を頭人とせ三隊の士卒を出し果て助友が示城外に在せる人馬を徐に繰れ
け出る者も入る者も齊々整々として混雑せど大阪が准備の船は夏く柴浦に
わせり。皆那浦に赴けるその日又扇谷より忍岡の城受合の頭人は白石城父重勝
も入間三三松山三十を副とせ其隊の士卒一千有餘昨夜半より河鯉の城を

出て忍岡を投て來ふけり。是より先ふ大山道節忠與い卯東小六明相荒川太郎一郎清英と俱ふ城遶與の准備ゆ。使を穂北へ遣しと落點餘之七有種ふ和睦の一筒を告知せそ。他が加勢ふ在陣させる五百の雄兵を皆忍岡へ召よせけり。登時落點有種い家僕小才二世智次と御民一百有餘を將て忍岡の城ふ來ふけれい道節則明相清英等と共侶ふ對面しと今番和談の成り一事の顛末を穂北へ并ふ隣里四人村い有種の所領ゆ。共侶ふ稲村へ參りゆ里見殿を後盾ふせば今ゆ後も告知せそ和殿へ咱等と共侶ふ稲村へ參りゆ里見殿を後盾ふせば今ゆ後も安ゆべ。と諭せば有種然いれ在下素より其意ゆ。ゆ里ども東西和睦し和君ら安房へ還りゆべ。我御黨阽ふそ影護くぞゆ。むぎん先我宅眷ふよく安堵させく後ふそ。稲村へ參るべけれと推辭ゆ道節理ゆと合て猶も餘談ふ及ひど。程ふ白石重勝等ぐ士卒を將て城受會ふ來ふければ道節先重勝と入間三三松山三十と伴當十名許を城ふ入れて明相清英有種と共侶ふ二重勝等ふ對面して。ゆやう。當城い是ゆ有種ふ僅ふ一擘の力をそ攻捕りと會耻を雪や一所ゆ然ども今和睦の上い返しまゆらまるふ異美ゆぎ但穂北五人村へ有種ゆ自ゆの所領ゆ。以て這城と易まく欲きまの美いいぬる日巨田生ふ我談ぎろ所ゆとゆるる是一欠甚麽ぞ。と問へば二重勝答てふやう。其美へ助友ゆ言上ふそ寡君定正の證文きふゆう。とゆいく躱て一通を會ふ出て遶與まを道節い受會ふゆ閲き見て有種自ゆの莊園ふて扇谷殿の賜ふふゆゆれば這照書へ要ふけれども忍岡の城郭と交易き爻者ゆとゆふ文言を載られれば後々ふ子孫の爲ゆ藏も措くもよゆゆん。と心て躱て有種ふ渡せば有種も亦閲し。然而重勝ふ初對面の口誼を云々と舒ゆどき既ふし受授の効果ゆ道節い明相清英有種等と俱ふ忍岡の城を辭去れば扇谷の士卒入替りて白石重勝入間三三松山三十等と俱ふ是を守れり。一進一退交情異

人其順ふるを以て賢とす。這舉ふ在ても里見の德を思いざる者あらけるを然い這時道節が准備の船い両國河ふ夏くあり且附從ひ一兵ゝ毎ゝ馬淵場九郎が殘黨を武藏相模ふる野武士ゝ毎ゝれべ城ふ留らんを欲せず。里見の民ゝ願ひ一べ今道節が隊ふ在る者九千餘名と成ぬ。道節い是等を將て両國河原ふ赴く程ふ有種も御人を將て水送ふそ俱ふゆくり伐る折ふ登桐山八郎良千ふ石濱の城を原亂ふ遣與て士卒一千許を將て這河原ふ退き來り道節等と共侶ふ船出を せまく欲まれべ聞ふ千葉の老黨原亂ふ曩ふ行德口の敗軍ふ駭怕れて主君并ふ家臣の家眷を將て河鯉へ脫れ去りふ大の日皆衞復して欲びの聲城ふ滿けり。然い良千ふ道節等ふ對面て且是ゝ等のよりを生げて准備の船ふ乘ちくも這地の船長五十三太素ふ吉い扇谷の封内ふ居まく欲せず東の岸へ陸らんとそ俱ふ桟を採りふ下總へ向ひ一べ留守ふる高師等。里見の舵工を相資けて我船を遣

まくも。准備ふ見りふる一べ道節山八郎ふ明相清英等と共侶ふ各士卒を分ち乘る。其船一百許ふるべ。有種ふ其乘果るまで御人と共侶ふ河原ふ一響時目送りて日暮て穗北へ還りける。話分両頭這朝稻村の城内ふ諸敗將ふ留別の饗食饌ふり中酒の時ふ及びて義成義通出て慇懃の詞を盡さる。左右もる程ふ諸敗將を迎の船ヨ多く洲崎の浦ふ來ふけり。第一番ふ憲房を迎とて山内の家臣建柴浦久弘望老兵十名雜兵三百餘名。第二ふ朝良朝寧を迎ヤて萬戸月十字七宿尻城戸久及大石憲重が兵頭菅荒三布七関口小田等是ふ從ふ士卒二百餘名。這四個の頭人ふ去歲の十二月本所の敗軍ふ各深疵ふ堪難て一旦仆ヨ一もあり一べ辛く命を免れて。河鯉へ來て將息て。其蒼稍癒一べ上ふ見えるる三三十ふ入間九郎松山五六の子弟ふ成りける間話林題第三番自亂を迎の士卒一百五六十名。原亂久這黨ふ亂ふ參らぬ。第

四番に為景を迎の頭人宇佐美三郎職政梶原后平二景澄士卒三百餘名弟
五番に義同義武を迎の頭人小磯真砂士卒二百餘名弟六番に稲戸由充を
迎の頭人妻有復六荻野井三郎士卒二百餘名と只成氏の迎の伴當のミヨスらぐ。
望見一郎科草七郎士卒五十餘名と船一艘のうち乗りて河鯉の城より來まろ。許
我へ路遠けれべ那里の士卒いまだ來着せざるゆゑ。當下里見の有司港口の小吏
出迎へて其頭人等と士卒各二三十名を引て稲村の城に來ゐけり。其他は皆船に在り
せて乱雑を防ぐとのふ犬塚信濃犬江親兵衛犬川荘太犬田豊後犬飼現八兵
衛等を奉りて客の間に酒飯の歓待あり。職政景澄及弘望等は其身并に荘内
外衆の為に犬江が神薬の奇效にて死の刀瘡の愈る歓びを演ぶ。然れば憲房
朝良以下の敗將齊藤盛實の至るまで迎の士卒を待不娯て他等が饗食餌果る
を躰て各急に別を告げて立去らまく欲せ。べ義成則諸敗將に良馬各一疋を

奉出物とて政木孝嗣満呂里時等せて。是を港口まで送らまむ。惟稲戸津
衛由充の。帰帆をいそぐを先衆人を出し果して徐に辭し去まくまる時。義成主
犬川荘太犬田豊後とともに。稲戸公羽に這二犬士に舊恩あり。他等に既に
報恩の志を遂うとて。涙ぐまれ。嫌るべくもあらず。越後に塩に乏き地方に我
今。義任悔順に代りて年毎に行德塩一千苞を賜るべし。必辭ぶべからずとあり。べ
由充は額に汗して。開いて思ひ。もとき。いろ。饒させのひねと。推辭めども。何でぶ听まん是
ようの後年毎に其餽送物あり。鳳く三浦へうち渡して。陸路を越後へ還りけり。只由
田に送れる。迎の船にうち乗りつ。諸敗將の迎の船も皆三浦より出し來て。俱に三浦へ歸着せり。益安
充のこころざし。房の洲崎より。相模なる三浦まで海上僅に六里なれば。其近きに由充の。開が中に
成氏の。迎の伴當ヨスらぬに憲房朝良の下風に立て。相模へ渡さんとの朽惜ければ。

立も得去らで在り程義成又對面してみづから是を慰めらる。其語次。御所成氏は
春王安王君の令弟ゆえをもまもまべ我大父里見季基と。然れども舊縁ふかもぎ。
是までの力戰。右まも左まれ既ふ恁親しく交り奉るべ舊交を結びまく欲を。
今いまも御領の郡縣ヨヌうぢを変ぬ上總の御弓の莊を馬の飼料ふまかるべ。
とのいまで成氏慙愧ふ堪ぎ推禁ゆそ合るやう。開ふ辱くけれども。我愚ふ七順逆の理ふ
暗く惑ふて和殿を伐まくせ。後悔矚を噬るのみふ。其莊園を受んやれ
よりも願ふ。歸鄕の憶念箭の如。些の伴當を貸ゆ當國より上總を歷て陸
路を許我へ還るべ。今の情願は是のみと又他事もなく請求むれば義成笑て異
笑もなく尊公其美はいよ易し。御舊縁もはべ犬塚信濃成孝を君を送らを
奉りて今宵は猶又逗留ゆれ明日ものべるべ。と留ひを成氏は変も悅らぎ頭を
掉りて最自由ふはべども。今より徑ふ去まく欲を。諸敗將は咸返さまし。我ゆ猶

淹留せべ。後の外聞も影護り。倘送りの士卒急ふ整へぎ我伴當をのみ召て
いなんいろ〳〵と性急る。需ふ義成禁難て。あらふべ御意ふ任せんとを退て
犬塚信濃ふ事恁々と吩咐ゆ。成孝久蟄くあるいそ。其士卒を整るふ素より
武備ふ家風ふ。あれば。一時ゆ。士卒の支度成りぬとふ成氏是ふ
勢馮ふ。成孝を労ひて迎ふ來る。科草七郎望見一郎等を急しく里見の諸
臣ふ別を告て遽しく立出る程ふ犬塚信濃成孝は行裝を整て望見一郎科
草七郎等と俱ふ内玄関ふ俟て在り。許我の伴當五十名里見の士卒二百名
義成主又命じて犬飼現八と田税力助をもて其夜の歇舍まで送り行ちむ。是
等の伴當も二三十名ゆうべ。成氏既ふ立出る時義通君は杉倉直元等を從
へて玄関まで是を送りぬ。這逆旅の准備は成氏は轎子ふて。成孝信道逆友
等は各騎馬ふて從ふ。弓箭銃砲鎗棒柳箱を報る者尠らぎ恁てを稲村の

城の後門より。拾出して齊々と上總路を投て俱に行けり。然ハ這急事ゆゑ。鄭の義成の云々とありける御弓の壯士の事ハ成氏の辭ひし隨ひて。其説いこゝ。是よりの後里見義竟の時ハ至りて。許我より足利義明を招きよせて上總の御弓ハ在ちゆゑ北條氏と力戰の後有ハ古うゝゝべ。時の人義明を御弓の御所とぞ稱ける。是其縁故なるべ。間話不題却説成氏ハ自他の伴當ハ俱せて且てゆく行程ハ這日ハ三四里ハ来。既ハ夕陽ハ及びゝゝべ。犬塚犬飼ら相計て。路傍なる寺院を宿とぞ。現ハ助らハ這里ハゆゑ又成氏ハ謁して辭ゝ去まくまる時成氏是を労ふゆゑ義成の好意を謝らる。現ハ其身の伴當を將て。逸時と共ハ侶ハ路をいとぞ其曉天ハ稲村を歸りける。然ハ又許我より來ける成氏を迎の船三四艘ハ頭人下河邊三郎行正間中大内藏直元と。士卒二百餘名うち乘りて。二十一日の下晡ハ洲崎の浦へ來着せり。這日順風なりゝぎれべ遲參這時ハ及びゝとのハ。まゝんども成氏ハ。陸地を許我へくらんとゆゑ里見の士卒ハ送らるゝて稲村の城を立去るひね。と雖ゝ行正直元駿怕ゝて。ハ。赴奉るとも及ぶべくゝぎ。疾船を漕復て。葛飾真間の渡りゆゑ。待奉るハ。ゝとゆゑ則湊吏人ハ就て來由を稲村の城へ告訴ゝ。次の日徐ハ追風を俟ゝて其船各帆を抗て下總を投て走らせけり。ハ程ハ成氏ハ犬塚信濃ハ送らるゝて。三四日の旅宿をゝ。安房より上總路を麻ゝて下總ゝ真間の里ハ來ける時既ハ申時ハ及ゝて驟雨連りハ降沃げべ犬塚信濃計ひて成氏の轎子を國府臺の城へ舁入まさせて。則ゝを歌舍ゝ。當城の番士の頭人真間井縱三郎秋季。継橋綿四郎喬梁ゝハ。豫てゝのゝ得ゝ敢ゝ。則振照弘教二潤鷲手古内をゝて是を迎ゝ。城の客の間ハ請待ゝ。須々利檀五郎二四的奇舍五郎ゝ。這城内ハ在り俱ハ這応接ハ預りける。是より先ハ成氏を迎の頭人下河邊行正真中直元ゝハ其船昨朝暴河ハ泝り來て。國府臺の城下ハ歌りて在り。昨日使をゝ當城の番士ゝハ成氏這

地を過らせあるべしと知せあるべしとのいせーらべ。番士等則あるべしと今這告あるゆゑ行垂直充い士卒五六十名をゐて。船より出て城ゆ來り望見一郎科草七郎等ゆ對面て。本月二十一日ゆい逆風ゆて船找まねべ。憶らぎ遅参まるるる且昨早ゆ暴河まで久う來て御歸路を俟奉りーそ。其顛末を聞て上ーべ。成氏等て其身も性急て。他ゆて俟ざりー行のまべ。敢其遅参を咎ゆぎ。然べ我い翌の朝開ゆ船ゆて許我(還るべ。其准備をせよとありーらべ行正直充まるるる。城内ゆ在り。船まで伴をせんとそ然べ秋季喬沼本等い猛可ゆ二三百個の歌客あり。一要時い混雑まぬまでも。素より准備ゆ匿ーらねべ親疎の歌欠を點配て上下の夕餐朝餉の儲蹂ゆまで既ゆ七日の暮ーらべ成氏い浴ー夕餐果て。臥房ゆ隣まる編室ゆ在り。望見一郎科草七郎のみ付りて最徒然ゆ見えーらべ。大塚信濃戍孝参りて。四表八表の話説るどーと是を慰るまるるせける。折ら驟雨の降ー降らぎ

窓を折り。夜風の音も平らぶぬ身い草枕旅ゆぶら。椎の葉ゆ装る飯るとそ。人の情の浅らぬを。浅くい思いぬ成氏も今昔のるをゆ出て。閑談いらく。蕭然之登時戍孝い謹で成氏ゆ稟をやう。曩ゆ御供ゆ入ま奉りー。村雨丸の一刀いりて君ゆ進らせて愚父大塚番作の末期の遺訓を果さぬと思ひーのみゆ。稲村ゆて。御同居の敗将達ゆ憚りあれべ稟ー出る便宜もるく今宵涯りの御別きゆりて心慌く愚意の及ぶ所をもて。こち敬焉ー奉る。不敬を饒させ給へーと。こいつ後方ゆ措こりーー刀櫃をやをら曳よせ蓋を開きて。合ひ出を件の大刀を。曩の儘ゆ際ゆ推立て。夏ゆを衝て稟をやう。いでもありた這御大刀い則君の御先考持氏朝臣の御紀ゆて。春王安王君の御遺物るれべいて君ゆ献せよと教えーる亡父の志を今果ーぬる臣等が欺ひ。何事ら是ゆ勝べた遮莫先途の失れべ。真の村雨丸欺ゆらぎる欺御面前ゆ試てん。饒させ給へとゆひつも。斉ら儘些退きて。曩の紋鮮き執出を件の

ゑり氏
ゑりゑ八郎
ゑりゑ一郎

犬うつ丸
孝王孝を
全ふして
遺訓を果し

刀を引拔べ三尺の氷夏猶寒き稀世の名刀。燈燭忽地光を增て四下も赫奕可る。其柄を佶と握持て輪々丁とうち振る程に怪むべく及尖ろ。颯と濆る水氣あり。露欬雷欬潑々と這席上に降沃ぐを成氏主僕は憶ぢも。袖を急めうち拂へば燈燭反て滅んとを折ら又簷上を過る驟雨の音凄ゝ。風さへ烈き雷霆の碾々と鳴亘る。四月下旬の闇き夜の窓の隙洩る電光走るや雲の行住ひそれとぞう見えねども。彼と此とは一時の感應又いふべくもあらざれば成氏憶ぢ聲を被やよや信濃疑ひ解ぬ。先其刃を斂めまやと詞急迫く制ぶ成孝は阿と応て准備の帛紗を懷より。拯り出ゝ濡ら刃を。推拭ひ鞘に斂を。膝を找て左右の手に棒げ卒を呈まる。成氏は左右ら受ぎやよや義士志は然ぢるれども我一介の微恩ぢるに報ふ。其名刀を以受んや願ふは和郎の家に傳へて子孫の寶貨にせよゝと辭ふを成孝は肯はず。御諚ぢいへども臣等は家に傳へる。桐一文字の短刀ぢ。近日又畢見

殿ゝ賜ゝる名刀もいへば。自餘の刀劍は欲ふぢ。這村雨は御家の重寶。他人の貨に做ぢべらぢ。この故に匠作番作。父子二世の忠心を臣等に迫りて果せるゝ辭いなぢ。ふと解れて成氏感謝に堪ぢ。寔に然ゝ我欲ぬ。と心ゝ大刀を受食ぶ。主客の胸も上天も。齊け雷の音絶て。檐の溜水猶遺る。殘滴のそゞ。成氏當下成氏は感涙坐に唇ひまでに村雨の大刀を弦番欽うち戴ぢ傷に閣て又成孝に謝ぢるやう。信濃よ。和郎の至孝。顛義を思へば。ゝ恥ゝ我非德を爭何せん。今這奇貨を恵れに旅ゝ。わ。ぶ酬ん東西ゝ。其義を一筆示さんと。坐せ。望見一郎は逆旅硯を執出さて墨を揚せて毫を染ぶ。科草七郎は。指燭を秉て照を程に成氏は坐右ら。便面をうち啓き。管を握りら苦吟ぢ。弦桁欽寫着をみづら讀見て含咲ゝら。拙け是ども是を見よとゝ。腕を伸て。開き。隨に授る。便面を成孝は遠く膝を找ら受戴き。却燈燭の

下ゐ身をよせて晴を定めそ是を見まび正ゐ是成氏の自詠の詞ゆそ。

まくらの許我の旅人ひら雨のいとかくり来てぬらを袖ゐ又其次ゐ心をめりて。

そらゐ有る人のまおとに雲ゐ〻でひとふりかるむら雨の大刀と讀れしび成孝屢ち

唫じ。深く感じ且ゐやう恐ゐ〻ら當意即妙是をこそ子孫ゐ傳へて家の宝ゐ社

らる。一唱三歎餘興、自禁ぜぞのと無礼ゐいへども。御返しを仕るべうもやとゝび成氏

そ是よりんゐんいつゐぞやく。と問れて成孝阿と答へて聲朗ゐ詠ぜらく。

今ぞゐを身のぬま衣いひら雨ゐ親の送せ一言の葉の露両三番吟ぜる程ゐ

成氏耳を敬て受つ憶ぞ膝拍鳴して迺愛ぞ元實詠達意求ぞ一でおのづから妙。

願ゐ是へ寫着てよを請つ刀の裏を合ひと裏をゝして差寄ぞを成孝ゐ敢

せぞ。其美へ許さをひねと固辭ども何ぞ聽へ元望見科草硯を舊ぞ卒と

ぞゐ促せび成孝竟ゐ脱る路ゐく。裏の黄光絹へ件の歌を書寫てまゐら

まび。成氏へ其黒ゐの乾くを待て大刀を裏ゐ斂る程ゐ短夜既ゐ深初て三更の鐘聲

受えけり。登時大塚成孝へ件の便面を推疊て懐ゐ焚と夾ぞ又成氏ゐ禀ぞ既ゐ

這年来の志へ仕りぬ人各其君の爲ゐ。許我へ隣國へとゝども今ぞ後へ君の爲ゐ

寸忠ぞ致をべうぞ。願ゐへ御身を愛一のひね。夜も深ていへび。枕ゐ就せのへぞやとゝび

成氏嗟嘆ていつゝ所宜ゐ小之。明日こそ別ゐ有りゐけをとゝゐ又望見一郎科草七

郎も共ゐ伯ゐ成孝ゐうち向ひて辭別の詞を盡しけり。抑這壯佼ぞゐ昱義ゐ大江ゐ神藥

ゐて死を起され恩義ゐ報ゐゐ。今ゐ大塚ゐ忠孝の志を見ゐ一ゐ。いとく敬服の思ひ

あり。悄地ゐ別を惜ぞける。徒而次の日へ天好晴一ゐ成氏へ辰俾時候ゐ國府臺の

城を立出て墨河ゐ造りて船ゐ乗る程ゐ下河邊二郎真中大内藏望見科菫

首ゐ。許我の伴當百十數名大塚信濃も士卒を將て其馬頭上まを送りける。

休題再説。往る二十一日ゐ政木大全満呂復五郎ぞへ諸敗將の還る船を洲崎の

港口に送り果て犬川荘介犬田豊後等を俱に稲村の城に退る程に犬村大学・堀内雛奥太郎・田税戸賀九郎・古屋八郎等が一隊の士卒三百餘名を引て新井より
めり来ぬる船十艘許洲崎の港口に果にけり其後又妙真音音曳も單節に浦安牛助と猿岡猿八等の士卒三十餘名同船して是も洲崎へめり来り其詰朝大阪
下野に士卒三四千名船七八十艘のうち無りて小森但一郎・木曽三次・千代九圖書助・
小水門目鼠内葉四郎等と俱に五十子より歸帆の途えめりまの日又大山道節帯刀と
登桐山八郎が二隊の士卒一萬餘名印東小六・荒川太郎一郎等と俱に一百餘箇の船に
乗走らせて同港口に歸着せり皆稲村の城に参集ひしめく屋の上に屋を重ねまで
人ヨヽく七熟鬧のよをうもめぐ然て犬江親兵衛に出て祖母妙真を港口に迎へ姥雪
代四郎に十條力二尺八を携て出て音音曳も單節に夙く這童弟兄を見せまく
欲を約莫這祖孫母子の功をめて恙なく再會に老を忘れ一鹿杖のつくも書

迭の長談に短き筆に細寫もくもめぐ看官是を查まべ。徒而其次の日に犬坂
犬村犬山等を目にて武藏相模に久しく在城せし諸頭人に皆義成主に見参して忠
戰軍功を賞せらる。妙真音音曳も單節に別に又這事あり。義成の夫人吾嬬
前にも拜見して東西ヨヽく賜りけり。這餘の士卒も咸恩命を稟ざる者なく都て休
暇の命めりて各安堵の思ひを做をり是より又五七日を經て犬塚信濃に下總葛飾
郡に暴河の邊に成氏主を送り果て士卒二百餘名を將て稲村の城へめり来にけり。
徒てぞ東西の憂乱餘波なく治りそ房總平安なりけるに良賤士民相賀して置
酒して千歳を唱ざるはなし。然程に瀧田なる義實老侯に義成義通其身まで
思ひ上げられ弁進の事且八個の犬士まで受領の欽びに堪ぎ我老臈されども是を
朝恩武恩を稟奉りるぐら其両御使に對面せで居るぐら這生緒を貪るべ
めぐぞとそ一日勅使代秋篠廣當と諚使熊谷直親を瀧田の城へ請待して

勸盃饗饌の欵待大くこゝらざ且べ。八大士ら参仕へて。其席ゐぞ預りける。是のち。ひろまさおかちゝ。このち。えゝ。
ようの後廣當直親い這地ゐ所要るけまとども東西の會盟を見果ぎして。
きくらく。
歸洛せんいさまどがゐそ。直親い水路より。鎌倉及五十子ゐ赴きそ。其兵を率催
ひろまさ。おかちゝ。ひろまさ。
促を。廣當い猶稻村の城内ゐ在り。這故ゐ東西の使者往來して會盟の日を
定やらる。唐山戰國の時諸侯其國境ゐ出て俱ゐ血を歃りて盟を做せり。おろんども。
武藏相模と安房上總い海を隔されば。會まゞ所ゐ。因て意ふよ相模の三浦と
安房の洲崎い海上僅ゐ六里ゐ過ぎ。ちをりそ天よく晴さる日ゐ相臨めば浦の古
家も濱の雛松も瞭然として好見えざる者ゐ。然べ會盟の日ゐ定正顕定い三
浦の濱ゐ出べ。又義成い洲崎の浦ゐ出て迥ゐ相臨む時東西の使者快船ゐ
うち乘りそ且往來して拒言書獻酬の義を行ふたへ則會盟紛れあるべらを
この熊谷直親豫う。秋篠廣當と商量して。相定る所之是う東西其

難備ゐ。時ゐ六月朔ゐ。黴雨新ゐ霽て薄暑炎熱を增折るふゐの日い黄道上
吉ゐそ。且海邊納涼の爲ゐ宜しけまべそ豫て卜定せ且けり。尓程ゐ扇谷定正
山内顯定い三浦の濱邊ゐ一座數間の假屋を架さそ。當日辰牌う朝服ゐて出
坐せり。這日來會の諸侯い千葉ゐ自亂三浦陸奥守義同其子景春三郎義武
上杉五郎憲房扇谷五郎九朝良式部少輔朝寧。并ゐ大石石見守憲重其子
源左衛門尉憲儀齊藤左兵衛佐高實其子兵衛太郎盛實長尾太郎
爲景白石城ゐ三里勝巨田苅新六郎助友小幡木工太郎東震原播磨ゐ亂久号
是ゐ這餘足利左兵衛督成氏の名代下河邊莊司行包長尾判官景春の名代
直江莊司兼光來會ま成氏い先度ゐ懲うり又景春い獨立の志あれば各病着ゐ
假托て老黨をして名代ときゐの他ゐ服の大刀自い女流ゐ且べ會盟ゐ與らぎど且越
路い遠ければ稻戸津衛由充も辭して來會せざるこゝゐの日諸家の從臣士卒ゐ至り

て枚舉に遑あらぬ。假屋の三面には紫の幔幕に白く竹に群雀の花號深做
るを掛連らして猩緋の氈をもて席とし其左右には數鎗五十條を架連て小幡
馬纒あり。捍棒を執る走卒二百名。汀渚に在りて敬儒を其小頭人各麻社衣を
卯く結ひて十手を執る者四五名在り。前濱には准備の快船二艘を繫ぎて其船毎に
究竟る。舵工八九名ぞ付りける。然べ又安房の洲崎の浦には去歳の初冬造らせる
望海の臺あるべ別に假家を儲るに及ぎ只中黑の花號ある幕を張連るのみ
なる。外物を飾ることなし。偖而這朝里見左少將義成右衛門佐義通俱に朝衣朝
冠なる件の臺に着坐在り。両家老八犬士諸兵頭有司近習に至るまで皆礼服の
袖を連ねて相從ふ者尠らぬ。其姓名は省て具にせず。快船の准備なども自他異
なるべくもあらぬ。三浦の假家には。諏使熊谷直親あり。洲崎の臺には勅使代秋
篠廣當あり。俱に這會盟を檢まるべけり。その日は朝より天うく晴れぬ。這里なる

那里なる千里鏡を用ひぎして頭人寸馬瞭焉なり。偖而己の左側に三浦の濱
なる暗號の烽火を颺げ。洲崎なる赤烽火をもて谷とき登時三浦の方より巨
田新六郎助友麻の肩衣長袴なる黄金莊衣の大刀を跨ける項に拵言書を藏
る細小樫を掛て船の中英にうち乗れば從ふ士卒五六名。舵工八名艪も八挺艪指
子揃へて漕出せば次に快船又一艘小幡木工太郎東震に這會盟の贄使にて其礼
服は助友に異らぬ。二樽三荷を相載て從ふ士卒八九名。艪も八挺艪なる漕せり。有
徒一程に洲崎の浦より漕出せる二艘の快船あり。其一船は別人なれど拵言書の正使
犬阪下野亂智に次なる。船に贄使政木大全孝嗣無まり谷礼服從者贄物
上に寫せる相似たれば今亦名状まぐらぬ。然べ東西四艘の快船は波上三里の程なる
端なくも遭際に元自疾を飛鳥に異らねば助友東震も亂智孝嗣も迭に
目礼をぬるのみ。一舞間に行過けり。約莫船の迅速なるを唐山にては快船とい

快く走まべきうべ。國俗の呼云鯨船又今俗の云推送り船の類ゆゑ今這四箇の船の迅速るを思ふべ。間話休題。尓程ゆ巨田助友い其船乙蛸く洲崎ゆ届りて伴當を將て浦邊ゆ登まべ敬言固の走卒両三名案内して臺下ゆ造らまひ助友則袴の括緒を解捨て拵言書を雙のふ捧げて階を登まべ大村大学立迎て引て義成主ゆ見あむ助友先義成主を拜まれべ義成急ゆ礼を返して其来意を問まくも當下助友い東西和睦會盟の一義を演て齎しる拵言書を呈閲て則是持資入道道灌ぶ糟屋の舘ゆ在りて定正顕定の為ゆ綴る所之義成是を大村大学ゆ讀まるゆ拵言い則五ケ條ゆそ善政を施して農を勧め天子將軍ゆ調貢を懈るのみくよく隣國ゆ交りて是を境を犯まるのみく賞罰を正くして賢を求め佞を遠ざけ嫡子を癈て庶子を立るとみられ妾をもて妻ゆ做まとみられ凶年ゆ隣國相資て其足らざるを補ひ不忠不義の行ひ是あるべうぎとゆ其要領を載られべ義成則姓名の下ゆ花押を寫して。指を刺て血を濺ぎ是を助友ゆ遞與て且其使節を労ひて大刀一口を授け息助友謝して退ぞべ小幡東震の船既ゆ造りて贄物を進呈て里見の青侍等是を受合ひるゆ白酒一樽黒酒一樽塩鴈三折櫃生鯛二折櫃乾魚二折櫃是乙東震則其目録を執りて階を登る時犬江親兵衛立迎て引て義成主ゆ其義を生呈まべ東震い目録を呈閲して東西會盟の事果くる両管領の欺ひを傳達き義成是を謝して又東震ゆ大刀一口を合ひせけり柳巨田助友の心術人柄い人の知る所之這小幡東震い年尚小けまども父東良の風あり。忠義廉恥ゆ薄くらねべ恁る時ゆも阿容ど後まぎ扇谷の内人ゆ只這俊傑二名あり。先度の恥を雪めうとて人皆是を誉ゆけり然べ這時犬阪亂智政木孝嗣が三浦の假家へ造りて定正顕定ゆ會盟の拵言書を呈閲ゆるも贄物の二樽三荷を進呈せども前ゆ寫ゆ趣と然べ差別るければ備ゆせず其拵言書い大村大学が

理義を詳ふ
して孝嗣
故主舜ふ
伴ころうう
あらくま
のうさん

たちらぐ
あらくま
のうさん
伴ころうう

綴る所〻是も又五个條ゐを自他示し合されども道理を知る者の藻まる文へ宛
符節を合せる如く好相似るを人一奇とも定正是を白石重勝ゐ讀せ顕定并ゐ
来會の諸侯と俱ゐ听け听果て又定正顕定より下長尾景春の名代直江兼
充ゐ至るまで連署姓名の下ゐ各花押を寫して又各〻指を刺血を染けて定正合て
亂智ゐ遽與まを受載きて得と見て謝して懐ゐして罷出る時定正則大刀一口を牽
出物とを次ゐ政木孝嗣入り脅り假家ゐ登り來て又君命を演て贄物の目録を呈
さるべ定正蓋て答る所を知らど顕定代りて謝して亦大刀一口を合せ出せ這時
大阪下野ゐ既ゐ伴の士卒を招て船ゐ乗りて去りぬ孝嗣も推續き船ゐ乗ち
まくまる程ゐ定正ゐ大石憲儀をりて急ゐ是を赴ゐて且のゐまるやう前ゐへ
我愆て罪ゐき汝を死地ゐ置り其寃枉の分明るよゐへ往る日朝良朝寧ゐ
稲村より〻へ來て詳ゐ告しべ只後悔の外ゐなど汝倘三世の恩義を忘る

とゐく忠孝の心今も移らぎゐ立〻へ來て我ゐ仕へよ然ば舊領ゐ十倍してヨヌく
美録を食せまく欲を這義誰何と挑きけり孝嗣是をうちゆて詞徐ゐ答る
やう御諚義りひぬ臣等も又是人〻其根を忘まて杪ゐ憑んや去るまじめ
臣ゐ君を棄るゐあらぎ君ゐ臣を殺せる夫覆水ゐ盆ゐ復らど吐言ゐ駟も
及ぶべからぎとの折靈狐の冥助ゐへ今いふて君ゐ見參せん廷尉憲儀我
為ゐ謝せよ君ゐ悪ませゐ河鯉佐太郎ゐ既ゐ死りぬ今ゐ義ゐ便り恩ゐ
縁る里見の忠臣政木大全ゐ栄利の為ゐ共誘さまて不義の奴ゐ〻へくもいなぎ
暇禀さと面も強袖を拂ひつ伴當を引そぎ立て又快船ゐ乗てぞ洲崎へ
遷りける憲儀ゐ興醒て只得孝嗣の答へをりて返命をまけまべ定正听て眼を
瞬り口を鉗ゐ鼻息のゐ又のよもなりけり然ばよの日東西の使者の快船水路
六里を往遷ぬる程洲崎の臺ゐて當所洲崎明神の神人等舞樂を奏を

犬塚信濃犬山道節。俱に扇子を開きて立て舞ふに、よく曲節に稱ひ、ひらび人咸驚き見て。何ぞの日に学びしるやと感ぜざる者なかりける。然べ又三浦の濱なる假家に、鎌倉より招きよせる能樂人等。祝言の能樂を謡頌ま其吹鼓の音迭に浦風に匂ひまで最も幽に聞えけり。既にして助友東震へ拙言書を捧て三浦に入り來り又亂智孝嗣へ連署の拙言書と定正頭定の謝書を受合りて洲崎の臺に赴かへり來て。俱に反命を致す程に夕陽西に斜に登時義成義通へ八犬士を招て臺を下りて俱に波濤盡處に立程に定正頭定も來會の大小名を招て俱に濱邊に立出て東西一望時眺望て各揖讓して退散ま是ぞ會盟果ぬけり。尓程に武藏相模安房上總なる漁戸ども大の次の日より江海の境を論ぜず。自他ともに交網を下さに俱に海幸ヨヌなりけるべ。いよ〳〵生活の便着をなる又武藏下總の境なる両國河及墨田河に浮橋を架渡して良賤往還の便ともなりぬ。両

國の士民相親ぶぞ。胡越も肝胆に做りぬけり。按ずるに夫木集に康正の年間墨田河に浮橋架ぬを詠る歌あり其歌まみ三河むらへ渡る今ぞ身をうれ橋のめる世なりけり。康正より文明まで遠らぬ。看官作者の用意を知るべ。本傳豊後の像賛に。墨田河ましてわたりやまらぬ世をうれ橋に昔なりけり。と詠りへ右の歌を取るに畢竟扇谷山内の両管領里見氏と和睦會盟して後の話説甚麽ぞや。開い又下回に解分るを聽ねり。

作者云前にもいる如く本輯百七十七回以下の前板發兒の時尚腹稿のまゝ看官に厚く結局までの趣を知せまゝ〳〵其題目を總目録中に附載に今編次るに及び豫思ひまゝに長くなるのから其題目を増改へさるがゆへ一回を上下に分ち或い三折一上中下廿三卷に成る者是ぞ是故に四十六の卷端に附録目を出へ宜く是と併見るべ。

南總里見八犬傳第九輯巻之四十九終

本傳刊行の書肆文溪堂賚言を今板結局編纂百七十七回以下の題目の前板の出さるにより文溪堂主人の乞ふて附録目數回を新に題し全部一百零六巻回外剰筆まで一百九十一回に結局大團圓に成べきよう作者の自注に見えたる如く分る様に這大部の書に總目録なくば四方の君子披閲の時毎に搜索に便りあらんべく且遺忘に備る足ざるべければ今番又巻ごとに首巻一巻を刊附せ首巻に所云總序全部總目録八犬士畧傳姓氏目録等是へ這巻あるとなれば則看官時に臨みて某の事は某の巻某の回にあらんことを知るに速にして利便是より捷なし況全傳中に善悪賢不肖の人物其姓名を漏さず悉皆記憶をべくらむ分るを姓氏目録に据時は搜索の暇を費さずして當に掌を指が如くあらべし言に半頁の餘紙あるとも賜顧億兆の君子に這故由を告奉るにあん。

右八犬傳第九輯五十三の巻の下まで今度出版全部に相成に依之四十七の巻と致分巻都合十巻の所彫刻出来の五冊四十九まぐ丑冬より賣出し置五十の巻より下五冊も推續に當寅春中無遲滯出板仕る猶追々に出来成に続て不に個に前書に記しに首巻總目録一巻差加えにて五冊ずつの都合不宜に付る異日別に致彫刻て入に続に右十冊両度に賣出しに付る仕に板彫仕に

敬白

天保十三年壬寅春正月吉日

大阪心齋橋筋博労町　河内屋茂兵衛

江戸大傳馬町二丁目　丁子屋平兵衛板